
マイナスの使い魔

ストック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マイナスの使い魔

【Nコード】

N2902V

【作者名】

ストック

【あらすじ】

ゼロの使い魔の世界での、ある奴隷の物語

発端

ゴトゴト 馬車の車輪が音を立てる。

周囲には絶望した表情の子供達。

俺もその様な表情をしているのだろう。

ここは奴隷商人の馬車の中。俺たちは奴隷として売られていく身。妹はどうなったのだろう。領主に捕まったままだが。

運が良くても無給の使用人として、使い潰される。

運が悪ければ・・・娼館に少女娼婦として売られて、数年の命だ。再び合う日がくるのだろうか。

どうしてこうなったのだろう。生まれて10年は幸せだった。そう、ほんの数日前までは。

辛い現実から目をそむけるように、過去へと思いをはせた。

「アルト、夕ご飯よ」

母であるカティーナの声が聞こえる。

「はい」返事をして食堂に向かった。

食卓には父マギナと、妹フォシルが既に付いていた。

父はこのヴァリエール公爵領コントーク村で農夫をしている。といつても、自分の土地も持たない小作農だ。

それでも、幼馴染だった母と結婚して、今のところ貧しいながらも幸せな生活をしている。

母は以前から村で評判の美女で、その血を引く妹は金髪の美少女だ。もつとも、以前母にふられた村長のハモシが事あるごとに嫌がらせをするので、

僕達一家は半ば村八分のようになっている。

それでも、その日までは幸せだったんだ。

始まりは、ロマリアから神官が来たことだった。でっぷりと太ったロンメルという神官と、護衛のメイジはいきなり村に来て、寄付を要求してきた。ブリミル教の中にはそうして地方の村を周り、半ば強盗のように金を巻き上げていく者がいるらしい。とりあえず村長の家に泊まることになった。ここまでは、俺たちには関係のない話だったんだ。

その夜、俺たち家族が就寝した後、いきなり護衛のメイジが家にむりやり押し入ってきた。

「おとなしくしろ。・ロンメル様が夜伽を所望だ。」三人の男が醜く笑う。

「お見逃してください。私達家族は経験なブリミル教徒です。」父が土下座をして頼んでいる。

「だまれ。村長も承認済みだ。お前等小作農どもが神聖なる神官のお相手ができるんだ。光栄に思え」

「なんならそっちの小さいのも相手してもらおうか」フォシルをみていやらしい笑みを浮かべる。

「お許してください。・私はどうなってもかまいません。子供達には母が男たちにすがりつく。」

「ふん。どうせ平民の中でも厄介者のお前等だ。お前はロンメル様のお付につれていってやる。」

男と子供たちは奴隷として売ればいくらかの稼ぎになるだろう。「笑いあう三人。」

その時、父がいきなり立ち上がって、男たちに体当たりをする

「早く逃げなさい。領主様に訴えるんだ」

「私達のことはいいから、フォシルをお願い」

俺は二人の声を聞き、フォシルの手を引いて逃げ出した。領主様に

訴えればきつと両親も助かると信じて。

数時間かけて必死に走り、ヴァリエール公爵家の城門に着く

「お願いします。コントーク村アルトといます。両親が神官の護衛に襲われています。助けてください」

必死に門番に訴える。

「神官の護衛に？何をふざけた事を言っている。どこかに消えろ。平民の小僧が」

門番からは相手にされず、逆に殴る蹴るの暴行を受けてしまった。

その時、外から豪華な馬車が帰ってきた。ヴァリエール家の紋章が付いている。

アルトは馬車の枠にすがりついて、必死に訴える

「ご領主様、お願いします。両親を助けてください」

しかし、返答は魔法であった。

「エア・ハンマー」詠唱と共に風の魔法が飛び、アルトの小さな体が地面にたたきつけられる。

「控えなさい下民。領主に直談判とは何事ですか。身分を弁えなさい」ピンクの髪の毛の貴婦人。公爵夫人。

「無礼者め。牢にでも叩き込んでおけ」金髪の中年の紳士。ヴァリエール公爵。

アルトとフォシルは公爵の部下により、地下牢に入れられてしまった

絶望

ヴァリエール家 地下牢で、俺とフォシルは抱き合って震えていた。
「ねえ、お兄ちゃん。お父さんとお母さん大丈夫だよ。ご領主様が助けてくれるよね」

俺の膝にすがりついて、必死に同意をもとめる

「・・・ああ、大丈夫だよ。俺たちが無礼を働いたせいでちよつと怒つただけだよ。すぐに話を聞いてくれるさ」

自分でも信じていない希望を、妹を安心させるためだけに話した。

次の日、食事も与えられず丸一日放置されて、二人とも空腹とこの渴きで意識朦朧としていた時、話声が聞こえてきた。

「それで、この者たちの両親が、貴殿の護衛に理不尽に暴力を振るつたと」

「ええ、公爵様。やむをえず、その場で始末させていただきましたが、神の代理人である我等に無礼を働いた罪、子供にも引き継がれます。その汚らしい子供達を奴隷として、お引渡しお願いいたします」

「男児の方はいいだろう。しかし、女兒は当方の奴隷として引き取る」

「しかし・・・」

「貴殿らは既にわが領民を二人殺しておる。いかに無礼を働いたといつても、子供二人まで奴隷として要求するのは過大すぎる」

「・・・わかりました。では、男児の方は間違いなく連れていかせていただきます」

「ああ、好きにするがいい」

その後、朦朧としたまま馬車に乗せられて、奴隷商人に売り飛ばさ

れた。

背中の奴隷の焼印が痛い。一生跡に残るだろう。

「なあ、俺たちこれからどうなるんだろう」「馬車に押し込められている金髪の少年が話しかけてきた。

「さあな・・・運がよければ使用人。悪ければ娼館行きさ。」「アルト」「イヤよ。そんなとこに連れて行かれるのは。どうしてこうなったの・・・私達なんにも悪いことしていないのに」「紫髪の少女が泣き出す

「ジャネット。泣かないで。きっと助かるさ」「先ほどの少年が慰める」「ダミアン兄さん・・・でも・・・」「少女は泣き止まない。

「下手な慰めは止めるよ。もうお終いなんだ。」「大柄な少年がため息をつく

「ジャック。普段の威勢はどうしたんだ。元気をだせ」「ダミアンが言う。

「元気を出せつてなあ。もうしばらくしたら皆バラバラにされて二度と会えないし」「赤毛の美少年

「いや、ドウドウー。そうとは限らないぜ。俺たちはまだまとめて一緒にされている。何か目的があるんだろう」「

ダミアンはしきりに皆を慰めている。どうやら彼らは知り合いらしい

「お前達はどうして奴隷になったんだ?」「アルトが問いかける

「俺たちは皆同じ村の子供さ。俺とジャネットは兄妹で、他の二人は幼馴染さ。村がいきなり盗賊に襲われて、俺たちは捕まって奴隷にされてしまったんだ」

「その時、お父様もお母様も・・・ヒック」泣き続けるジャネット

「そうか・・・俺も似たようなもんだ」アルト。

それきり皆は沈黙した。ジャネットの泣き声だけがいつまでも馬車

に響いていた。

粗末な食べ物と少しの水。それだけで狭い馬車に押し込められ、何日もたつ。

皆は心身共に疲れきっていた。

ようやく目的地についたようで、馬車がとまる

「ガキども、早く降りて来い。これからお前達はここで過ごすことになる」

奴隷商人が鞭で追いたて、アルトたちは降りた。

周囲には何も無い荒野と岩山が広がり、目の前には洞窟があった。

「早くいけ」ピシピシと鞭で打たれ、抵抗する気力もなく洞窟にはいる。

「よくやった。また集めてこい」白い服を着たメイジが奴隷商人に代金を払う

「まいど。しかし毎回子供ばかりで苦労しやすぜ。次回からもっと代金をくませえ」

「付け上がるな。お前ごとき我等がその気になればいつでも始末できる事を忘れるな」

メイジが杖を振るう。巨大な火の玉が荒野に大穴をあける。

「わ、わかりやした。それではまた」コソコソと奴隷商人が逃げ出していった。

「ふん。下衆めが。しかし、そろそろアイツも使い勝手が悪くなってきたな。次回で始末するか。この場所を知られているしな」

白い服のメイジは独り言をつぶやくと、洞窟の中に入っていった。

アルトたち奴隷は、乾いた血の付いた首輪を付けられ洞窟の牢屋に放り込まれた。

「よく聞け。お前達はもうここからは逃げられない。お前達に付けられた首輪は、この場所から遠ざかると自動で締まるようになってる。それでも抵抗していると、最後は首をねじ切られるようになってる。我々に反抗しても同様だ。その首輪についている血は、逃げたり反抗したりした愚かな者たちの血だ。諦めるんだな」白い服のメイジが説明する。

アルトたち新入り奴隷10人に絶望が訪れた。

地獄

ダミアンがメイジに質問する

「それで、俺たちに何をさせようというんだ」

「・・・すぐにわかる。せいぜい長持ちするんだな」

不気味な言葉を残して、メイジは去っていった。

相変わらず泣きじゃくっているジャネット。必死でなだめようとするダミアン。

「くそ！！説明ぐらいしやがれ」ジャックが牢の柵をけりつける。

「・・・うるさい。静かにしろ。」向かいの牢から声がするが、奥の方にいるためか、姿が見えない。

「あんたは・・・？」アルトが問いかける。

「あんたらと同じ奴隷だ。ここに来て10年になるかな。他の奴隷は全員死んだよ・・・」

「姿が良く見えないんだが、もう少し前に来てくれないか？」

「・・・別にいいか。どうせお前等だつて死ぬ運命だ・・・」少しためらったようだが、前にでてくる。

その姿を見てアルトたちは驚きの声をあげた。

その姿は筋肉隆々とした巨人。ハルケギニアで忌み嫌われる存在。

「お前・・・その姿・・・オーク鬼？でも人間の言葉をしゃべった」ドウトゥーが問いかける。

「ああ・・・もはや亜人になってしまつて、戻れないんだ。お前達もそのうち・・・」

「亜人になつた？どういうことなんだ！！！！」アルトが絶叫する。

「まず最初に言っておこう。俺の名はツネス。もう意味もないが・・・」

10年前まではまともな人間だったよ・」

「人間だって！！まさか」

「戦争で亜人のオーク鬼やトルル鬼が使われる事があることを知っているか？」

「ああ。兵士をしていた死んだ親父から聞いたことがある。従軍していた時に見ただけど、言葉も通じないのにちゃんと命令を聞いていて、味方なのに不気味だったと言っていた」ジャック

「アレらは、みな元奴隷の平民さ。成長期前の子供に亜人の体液から作られた薬を投与すると、徐々に亜人に変わるんだ。人間としての意識は消えないから、ちゃんと命令を理解できる。最も、反抗されないよう首輪をしたままだが・」

「そんな・・それじゃあ、私達もオーク鬼に・・いや！！絶対イヤ」
ジャネット

「それなら、まだマシさ」ツネス

「マシって・・どういうことだよ」ダミアン。

「人間の子供をオーク鬼にしている場所はここじゃないよ。ここはもつと酷い場所さ」

「もつと・・」アルト

「ここは異端研究所インフェルノ。禁断の研究を人体実験で行う最悪の場所。ハルケギニアの最暗部に属する場所さ。一般人や普通の神官は知らない事だが、ロマリア教会は異端と認定した天才を拘束し、こういつた場所で研究させているんだ。その研究成果の戦争に役立つ強化した亜人兵士を各国に売ったり、人体実験の結果よく効く魔法薬を開発して売ったり・」

ツネスは詳しく知っていることを話し出した。

・軍事や新魔法薬開発のため、秘密裏に奴隷をつかって人体実験をしていること

・インフェルノがある場所は精霊の力が強く、魔法の研究に向いて

いること。そういつた場所を教会領として立ち入り禁止にしていること。各国も黙認していること。

・ここは研究所なのでいろいろな実験が繰り返され、どんなに長くてもツネス以外一年生き延びた者はいないこと

・ツネスは最初の亜人化成功例なので、サンプルとして生かされている事。

・現在、精霊力を無理矢理人体に封じ込め、超人化する研究や、相手の魔法を吸収する能力を得る研究がされていること。

ツネスの話を聞いたアルトたちは、絶望を通り越して何も考えられなくなっていた。

「まあ、お前達の中で実験が成功した奴は、俺のようにサンプルとして生かされることもできるかも知れないが・・成功の望みは薄いな。こんなことを話しても無駄か・・それじゃあな」

それだけ言うと、牢の奥に姿を消した。

「おい・・どうする。このままじゃ確実に死ぬぞ」ジャック。

「だけど・・逃げても殺されるし」ドウドウ。。

「とりあえず、様子をみよう。なんとか反撃する隙をつかかって・・

「ダミアン。

ジャネットや他の子供達は恐怖のあまり、泣き出続けた。

アルトは部屋の隅にすわり、ぼんやりと考えていた。

「こんな地獄で生きていて、なんの意味があるんだ。父さんと母さんもころされた・・

妹とももう会えないだろう。もういいんだ・・」

暗い絶望に身を任せ、すべてを諦めていた。

実験

つれてこられてから、一週間が過ぎた。

その間に何人もの子供が連れて行かれ、実験に使われていた。帰って来たものは皆無。

ダミアンたちも希望をなくしてふさぎ込んでいる。アルトも同様だった。

「次はその子供にしよう。連れて行け」

牢の前で子供を物色していた中年の男が支持する。その耳は長く尖ってた。エルフである。

エルフ。亜人の中でも人類の敵とされ、精霊を行使する強力な魔法の使い手。

ハルケギニアで平民を支配するメイジ達より、さらに強い種族。

平民・貴族問わず、恐怖の対象として教えられる。

最初見たときは、子どもたちは泣き喚き、パニックになった。

本来、ブリミル教にとっては敵であり、見つかるとすぐに排除される。

だが、ここは異端の技こそ研究をする所で、エルフの中でも居場所がなくなったはぐれ者が研究員として雇われていた。

「ふむ。なかなか難しいものだのう。精霊を体内に封じ込めて行使するというのは」

実験に使われた子供を見下ろしてエルフが言う。ベッドに縛り付けられた子供は、体のあちこちが膨らみ、一部が破裂していた。

既に事切れている。

「やはり、メイジの子どもを使うべきなのでしょう。ナノーク教授」助手のメイジが話す。

「いや、メイジだと体内に入れた精霊が体内の魔力を食い尽くしてしまうので、すぐ魔力が切れて精神が破壊されてしまう。魔力を持たない

平民が一番じゃ。ルクル」

「しかし・・・何度実験しても制御できずに破裂してしまいます。」

「制御か。エルフの精霊魔法も、メイジの系統魔法もルーンを使って精霊に命令して制御しておるんだよな」

「はい。しかし魔力をもたない平民がルーンを唱えても、精霊には届かないでしょう。」

「まて・・・平民でもマジックアイテムは使えるな。どうやって使っているのだ？」

「それは、マジックアイテム自体にルーンを刻んでいますから」

「そうじゃ、その手がある。ククク。次の実験は決まったぞ」

「何か良い案でも」

「まず実験じゃ。次のモルモットを連れて来い」

「離せ。離してくれ・・・」泣き喚くダミアン。恐怖のあまり失禁している。

「クククク・・・そうおびえんでもよい。これが成功したら、お前等平民でも魔法が使えるぞ」

「そんなのいらない！！助けてくれ。」

「元気がいいのう。お前ならたえられるじゃろう。痛いだろうがせいぜいがんばるがいい」

ベッドに縛り付けられているダミアンに、高速で回転するドリルが迫る

実験室に絶叫が走った。

ヴァリエールの館にて

「お兄ちゃん・どこにいるの？」フォシル
目が覚めたら、いつもならずく近くにいてくれる大好きな兄がいな
かった。

「お父さんも・お母さんも・お兄ちゃんまでいなくなった・」
そのまま泣いていたら、牢の前に中年の女性がきて、牢から出された
「いつまでもないてんじゃないよ！！さっさと来な！！」

頬をはられ、引きずられていく。

「いや・お母さん・おにいちゃんーん！！」

「アンタはもう奴隷なんだよ。ここで働きな。働きが悪いと、奴隷
商人に売られるよ」

容赦なく鞭で叩かれ、雑用を押し付けられるフォシル。
ここにも違った形の地獄があった。

インフェルノ牢内

戻ってきたダミアンを見て、アルトたちは叫び声を上げた。

明らかに一度背中を切りひらき、閉じた跡がある。

「クククク・このやり方が正解じゃな。精霊を入れると同時にル
ーンを骨に刻み込み、精霊を制御すればいい。」

そうすれば魔力を持たない平民でも精霊魔法が使える。最初に精霊
力吸収のルーンを刻んだから

かなり強い魔法も使えるようになる。傷は水魔法で治せば何度でも
実験できる。これは面白い実験になるぞ！！！！！！」

狂気の表情でナノーク教授と呼ばれたエルフははしゃいだ。

その姿を憎悪をこめてアルトは睨みつけていた。

一年

あれから、一年がたった。

人間の骨は大小あわせて約200個もある。その一つ一つにルーンを刻んでいく。

これがどれほどの苦痛か想像も付かないだろう。

あるいは、あっさりと殺されていたほうが恨みが残らなかったかもしれない。

しかし、今までの実験と違って、骨にルーンを刻むといった小規模な実験になったため、誰も死ななくなった。

体を切り裂かれ、骨に響く苦痛を与えられても、水魔法ですぐに治癒される。

そして牢に戻され、回復したらまた実験に使われる。

一週間ほどのローテーションでこれが永遠に続く。

つまり、死にたくても死なない地獄が続く事になる。

アルトたちは、自分達の親を殺し、このような生き地獄におとした平民・貴族・エルフすべてに憎しみを募らせていった。

精霊力とルーンの影響により、体にも変化がおきていた。

ダミアンは12才程度の子供の体に退行した。

ジャックは逆に成長してしまい、大きな体となった。

ドウトウーやジャネットも目の色や皮膚の色に変化がおきた。

そして・・・アルトは黒髪黒目の容姿になった。

「これはどうしてこのようになるか・・・つくづく面白いもんじゃ教授が笑う。」

「精霊力により何かの影響を受けているのでしょうか。体そのものが、あるいは精神の方に原因があるのか・・・」

「まあ、いずれにしろ、実験を続けていけばなにかわかるじやろう」

教授と助手は嬉々として実験を進めていた。

牢内にて

「俺は、もう我慢できない。しんだっていい。反抗する」ドウトウー

「俺もだ。まだ子供なのに・・・体までいじくりやがった」ジャック

「・・・」ジャネットは無言。

「・・・俺は、まだ死ねない。妹を助きたい。そして、領主に復讐したい」アルト

一時は死んだほうがいいと思っていたアルトだったが、憎しみを糧に実験に耐えていた。

「・・・もう少し待て。俺たちは確実に強くなっている。いつかチャンスが来るはずだ」ダミアン

その時、牢の前に身分の高そうな青い髪の男が数人の護衛と共に立った。

「これが魔法が使える平民の成功例か・・・」

「そうだ。ワシの傑作じゃよ。こいつらの軍隊を作ると、ハルケギニアを征服し、エルフにも勝てるじゃろう」

「貴様！エルフの分際でそのような口を・・・このお方をどなたと」

「よい」青髪の男が護衛をとめる

「ふん。知っておるわい。王族のクセに魔法が使えるできそこないのジョゼフ王子じゃろう」

「そうか。ならばみせてもらおう」

教授はアルトとダミアンを牢からだし、広い地下の闘技場に連れて行った。

「二人とも、相手を殺す気で戦え。戦わないなら二人とも殺す」

服従の首輪で散々締め付けたあと、二人に宣言する

「仕方ないな・・・ダミアン。俺はまだ死にたくない」アルト

「俺もだ。最後だから言うが、お前には感謝している。この地獄の中でお互い励ましあって生きてくれたことを」ダミアン

「俺もだ・・・いくぞ兄弟」

アルトの手から炎がでる。ダミアンの目から雷が出る。

お互い人間の限界をはるかに超えたスピードで動き回る。

技も効率的な動きもなにもかも無視した、ただスペックだけぶつけ合う戦い。

だからこそ、見る者が身の毛をよだつ凄惨な戦いになった。

アルトが血にまみれて倒れる。全身傷だらけのダミアンが膝を付く。

「すばらしい。杖ももたない平民がここまで。なぜ私がここに来たか、言わなくてもわかるな」

「魔法が使えるようになりたいのじゃろう。だが、この者たちのやり方では、お前には無理だ」

「なぜだ」

「お前は魔力を生まれつきもつメイジじゃからよ。精霊を体内に封じ込めたところで、精神力が食われて精神がいかれるだけだ」

「・・・そうか。俺はどこまでも無能な王子か・・・」

「無能かは知らんが、メイジではあるな」

「わかった。ならばこいつらを私の奴隷として売れ。その代わりに、便宜をはかろう」

「よいじゃろう。この黒髪の子供を残して、残りは連れて行くがいい。あと、もっと実験材料をよこせ」

「わかった・・・」

ジョゼフ王子に四人が連れて行かれ、インフェルノにアルトは取り残された。

忠誠

重傷をおったアルト以外の4人は、ジョゼフにガリア王国に連れられていった。

馬車の中でこれからの事を思う。

「俺たちこれからどうなるんだろう」「ジャック

「なんにしろ、あの地獄からは出られたんだ。毎週のように体を切り刻まれる苦痛よりましだ」「ドウトウー

「でも・・・」ジャネットはまだ暗い顔をしている。

「俺たち4人でがんばれば、きつといつか自由になれるさ。」「ダミアン。

期待と不安を抱えながら、4人はいつまでも話していた。

ガリア王国宮殿プチ・トロウ。

馬車から下ろされた4人は、以外にも少し広めの部屋に案内された。牢に入れられると思っていたダミアンは警戒するが、他の者は久しぶりのベットに狂喜した。

「ベッドだ、やわらかい」「ドウトウー達が横になる。

「お前達、まずは風呂に入り、その汚れた服を捨てる。新しい服に着替えて、使用人用の食堂にくるがいい」

部屋まで付いてきた護衛に言われる。

「なんだ。何をたくらんでいる」「ダミアン

「心配するな。ジョゼフ殿下のご命令だ。あの方は奴隷にも無用な虐待をするお方ではない。」

どうやら、護衛はジョゼフ王子を信頼しているらしい。

「食事が終わったら、殿下からお話がある。それまで部屋で休んでいるがいい」

半信半疑だったが、何年ぶりの入浴とまともな食事をすませ、ダ

ミアンたちは久しぶりに安らかな気持ちになった。

食後、ダミアン達はジョゼフに呼び出され、執務室に入った。

「さて、私がこれからお前達の主人になったジョゼフだ。一応このガリア王国の第一王子だ」

王子にふさわしい威厳を持って話す。ダミアンたちは自然に膝を付いた。

「この度、私達兄弟をあの地獄より救い出していただき、また人並みの扱いをしていただき、誠に感謝いたします。私達兄弟を代表してお礼申し上げます」ダミアン

「ふむ。一応の礼儀を心得ているのだな。お前達はなぜ奴隷になった」

「私達の故郷であるトリステイン王国ソウル村は、盗賊の襲撃にあり全滅しました。村長をしていた父も、母もその他の村人もすべて殺され、私達は奴隷商人に売られたのです」

「そうか。トリステインの統治能力はかなり落ちていたようだな。首輪をはずせ」護衛に命令するジョゼフ

「殿下。このような平民達を解放するなど。何をするかわかりませんぞ」

「いいから外せ。私に反抗して何の益があるのだ。かまわん」

「はっ」護衛によって、ダミアンたちの服従の首輪が外される

「殿下・重ね重ね感謝いたします」ダミアン。

「別に奴隷から解放してやったわけではない。お前達4人の代金は20万エキュード。これから、お前達にふさわしい仕事を与える。当然報酬を支払うので、自らを買い取れ。すべて払い終わったら、ガリア国民としての身分を与えよう」

「失礼ながら殿下。なぜ先に服従の首輪を外したのですか？」ジャック

「お前達の忠誠をかうためだ。どうせ逃げ出しても行く所がなかる

う。私個人に忠誠を求めるのなら、首輪など邪魔になる」

「・・・わかりました。私達4人、殿下個人に忠誠を誓います」

「期待しよう。後のことはこいつに聞け。下がってよいぞ」ジヨゼフ。

護衛に連れられて、地下の一室にいく4人

「新しく団員になるものをつれてきました」

「入れ」短い言葉が返ってくる。

ダミアンたち4人が入ると、部屋の中にはフードをかぶった一人の男？がいた。

「お前達に最初に言っておく。お前達の仕事はガリアの裏側のものだ。暗殺・諜報その他だ。任務の途中で死のうとも、誰も何も言わん。その事を覚悟しておくがいい。私はガリア北花壇騎士団一号 影霞のシャドウだ」

フードに隠れて顔が見えない。顔というより、体全体が服に纏われ、影のような印象だ。

「はい。あの地獄を思えば、なんでもできます」ダミアン。

「いい返事だ。では任務の前に、このガリアのことを教育する」

それから3ヶ月間、ガリア国について貴族のこと・平民のこと・地理のこと・王宮のことなど、詳しく教育され、北花壇騎士として任務につくことになった。

インフェルノ牢内

ジヨゼフからの大量の資金により、子供の奴隷がさらに集められていた

「どうしよう・・・これからどうなるの？」すすり泣く子供たち

「大丈夫だ。すぐに殺される事はない。希望を捨てず、実験に耐えて力をてに入れる。必ずチャンスは来る」

そういつて必死に子供達を慰めるアルト。

それは、彼自身にも言い聞かせている言葉だった。

転機

ここに連れてこられて3年が過ぎ、アルトも13歳になった。

身分は奴隷のままだが。

アルトは自分達の後につれてこられた子供達の面倒を見て、慕われるようになっていた。

「いつかきつとここから抜け出せる。今は耐えるんだ」
毎日必死に言い聞かせ、子供達を上げます。

子供達は60人にもなっていた。皆盗賊に親を殺されたり、誘拐されたりで奴隷におとされた。

『この子達は俺の弟妹だ。俺が守らないと』
アルトは少しでも子供達を守ろうと、進んで実験を引き受けたりしていた。

何度も実験をされた結果、驚異的な体力と精神力を得て、あらゆる魔法を使えるようになり、教授の最高傑作とされた。

「アルト。今日はお前だ。新しい実験をする」

牢から引きずりだされ、いつものように実験室に連れて行かれる

「これ以上何をするつもりだ」教授を睨む。

「くく。以前から古代遺跡で見つかる鎧があつてのう。何らかのマジックアイテムらしいのだが、意思をもつインテリジェンスメイイルでの。纏ったものが軒並み発狂して役にたたなくなるのじゃよ。それでお前で試そうというわけじゃ」

全身真っ黒なフルプレートを示す。

「ふん。さっさとするがいい。だが俺は発狂なんかしない。お前達

すべてに復讐するまではな
「そつでなくてはな。では、着るがいい」

自分の意思で漆黒の鎧を着るアルト。
装着したとたん、何者かの意思がアルトの精神に侵入してきた。

『ぐああああ。くそ!!!』

脳みそに焼き鏝を突っ込まれたような痛みがはしる

『これは・・・よい素材だ、我が宿主にふさわしい』

『ぐつ 宿主?』

『そつだ。我が復活のため、強靱な肉体と精神力をもつ者を探していたのだ。お前は最高だ』

『グググ・・・ふざけるな』

『抵抗するな!! 脳が焼ききれるぞ』

『お前なんかに乗っ取られてたまるか』

『これは・・・なんとという精神力だ。この我が押されている
精神世界で何者かの意思と必死で戦うアルト

『俺が何年拷問に耐えたと思っっているんだ!!』

『ば・・・馬鹿な・逆に押し返され、我の精神に・・・
俺にはやる事がある。すべてに復讐してやる。』

時間にして約5分。しかし、アルトにとって数時間も感じられた戦いは、アルトの勝利で終わった。

精神世界でねじ伏せられ、這いつくばるインテリジェンスメール。

『くつ。私の負けだ。我が名はヴァリヤグのセケン。お前に従おう』

『ヴァリヤグ?』

『お前達、平民とされている者たちの祖先だ。一族はマギ族に滅ぼ

され、残った者は知識を失いマギ族の僕と化した。

ほんの一部の者はこの鎧に意識を写し、マギ族への復讐とヴァリヤ
ーグの復活の時を待っている』

『ならば、俺に力を貸せ。すべての者を滅ぼすのだ』

『御意。マイマスター。我がすべての知識と魔法をささげます』

アルトの中にセケンの知識が流れ込んできた。

6000年前、セケンはヴァリヤーグ王の側近であり、一族最高の
魔法技術者として尊敬を集めていた。

インテリジェンス系マジックアイテムの作成、いろいろなルーンの
開発。

ブリミル率いるマギ族に滅ぼされた時、鎧に精霊と自らの意識を封
じ込め、復活に備えた。

今の時代には失われた古代の魔法が、アルトに流れ込んでいく。

『これだ・・この魔法さえあれば、皆を解放できる』

その中の一つ、水の精霊力を使った精神系魔法【マリオネット】を
学び、アルトは歓喜した。

「ふむ・・さすがのこやつも耐えられんかったか。おしいのう。長
持ちした実験材料だったのに」

硬直したままのアルトを見て、教授が言う。

「待ってください。異常な精霊力の塊が・・危険です!!」

漆黒の鎧の表面に電光がはしり、教授と助手を貫いた

『な・・なんじゃこれは。エルフである私を支配するだ!!!!』

電光は一瞬で脳に達し、命令が伝わってくる。それはどんなにあが
いても抵抗できない強さを持っていた。

『服従の首輪をはずせ』

アルトの声がインフェルノに響き渡った。

ヴァリエール領

「フォシル。フォシルは何処？」ピンク色の髪をした美少女が叫ぶ。
「ルイズお嬢様。どうされました？」金髪の少女が答える。

「聞いてよお母様ったら・私の魔法が使えないからって、努力が足りないなんていうの!!」

「お嬢様は一生懸命がんばっていらっしやいます。私達にはわからないですが、きっといつか使えるようになりますわ!!」

「ありがと・フォシルだけよそういつてくれるのは。他の使用人まで私を馬鹿にするし」

「お嬢様・私はいつでも味方です」
そういつて微笑む。

ヴァリエール家の奴隷となつて3年。同じ年のルイズに遊び相手として仕えていた。

もはやあの悪夢のような日も記憶のかなた。兄のことも最近は思い出さなくなつていた。

ルイズは友達として接してくれて、彼女に対して絶対の忠誠心を持つていた。

「さ、クツズペリーパイを焼きましたよ。召し上がれ」
給金は出ないが、衣食住は保障され、一般の平民よりは豊かな生活ができる。

フォシルはそれなりに幸せであつた。

解放

カチツと音がして、服従の首輪が外れる。

何年ぶりかに軽くなる首。

「ハハハ・・・これで自由だ・・・」

教授と助手の精神に侵入し、強制服従の魔法をこめる。

「次はみんなの首輪をはずせ」

インフェルノ内を回って、奴隷としてつれてこられたすべての子供達を解放する。

神官達は全員服従魔法で従わせた。

電を使って脳の電気信号に干渉し、逆らえなくするのである。

神官たちは反抗の意思を保てるが、体が反抗できなくなる。

「憎い・・・殺してやる」子供達に取り囲まれる教授や神官たち。

今までの恨みを晴らすように徹底的に傷つけられる。

「た・・・助けてくれ。俺は・・・」炎の魔法で焼かれる男のメイジ。

「苦しい・・・やめて」水の魔法でおぼれさせられ、必死に命乞いする女のメイジ

「な・・・なんだこれは。元にもどしてくれ」土の魔法で足を青銅に錬金され、のたうつ神官

「やめる・・・たのむ。ワシは研究をしていただけなんじゃ」風の魔法で切り刻まれる教授。

インフェルノにいる者たちに、今までのすべての悪行の報いがまわ

ってきた。まさに地獄だった。

アルトは、彼らを殺す寸前まで痛めつけさせたあと、水魔法で治療し、服従の首輪をつけて牢に入れた。

「アルト兄さん。なんで彼らを治療するんだ。あんな奴等死ねばいいんだ」

アルトに懐いているメシルがいう。

「そうよアルト兄ちゃん。お願い。妹の仇をとらせて」

妹を実験で殺された、スズミが言う。彼女は小さい体を震わせて泣いていた。

「悔しいだろうが、今は堪える。殺すのはいつでもできる。人質にできるかもしれない」

そう説得して子供達を下がらせた。

一夜が明けた。

奴隷達に占領されたインフェルノ。解放された子供達は何年振りかの笑顔を浮かべていた。

暖かい食事を食べ、神官たちの部屋のベッドでゆっくりと休んだ。

「さて、これからどうするべきか。まず金だな」

インフェルノ内の財貨をすべて集めるアルト。3万エキューほどあった。

それを奴隷たちで分ける

「ここから出たい者には、一人500エキューをわたす。これをもって自由にしろ。」アルト

子供達は自由になれる事を喜んだ。金を受け取り、それぞれ故郷に帰っていく。

全員がフライの魔法を使えるので、故郷まで飛んでいけるだろう。

「俺はここに残るよ。行くところも無いしな。亜人の群れにも入れないし、なるようになれだ」ツネス。

「いいのか？」アルト

「どうせここから出たって、オーク鬼として退治されるだけだ」

「そうか。俺は妹を助けたら、どこか安全なところを探して旅をするよ。こんどこそ家族と暮らすんだ」

「そうか・・・お前が幸せになれるよう祈っているよ」

「ああ・・・今までありがとう。お前も俺の兄弟だ」

握手をして別れた。

ヴァリエール家

「なんだあいつ。何か用でもあるのか？」門番

全身を漆黒の鎧で包んだ不審な人物が近づいてくる

「止まれ。ここはヴァリエール公爵様の城だ。お前は何者だ」

「何者でもいい。妹を返して貰うぞ」

「何を言うか・・・立ち去れ」剣を突きつける。

「ふん」

黒戦士の手から炎が出て、門番を焼き尽くす

「ぎゃああああああああ」一瞬で黒コゲになった。

「貴様！！！！！！皆来てくれ。侵入者だ」生き残った門番が城に入っていく

アルトは数十人の兵士に取り囲まれた。

ドーンという爆発音。ベキベキという何かが折れる音。ヒュルヒュルという風の音。

城の入り口は大騒ぎとなった

「何事ですか騒がしい！！」カリィ又公爵夫人が執事に聞く。

「ハッ。城に侵入者が。現在魔法衛士隊にて捕縛中です」

「侵入者ですか？それにしても大きな音がしますね」

「ふてぶてしくも正面から乗り込んで来たようで」
「正面から？フッフ・面白い。私も行きましよう」
「奥様。御身に何かございましたら・・・」
「執事
問題ありません。私の名を忘れましたか？」
「そうでしたな・・・」
『烈風カリン』様」
何年振りかに鎧を着て城の入り口に行くカリーヌ。
そこには黒ずくめの鎧を纏った男がいた。

拒絶

城の入り口付近には、衛士たちが何十人も倒れていた。ある者は焼かれ、ある者は足の骨を折られてうずくまり、ある者は手足を切られていた。

その中で一人で立っている黒い鎧の男。

顔はマスクに覆われて見えないが、一目見ただけで恐ろしいほどの力を感じとれた。

久しくなかった強敵との戦いの予感に震えるカリィヌ。

「このヴァリエール家に正面から乗り込んでくる度胸は認めましょう。名を名乗りなさい」

「……………」黒鎧の男は無言。

「それでは、こちらから名乗りましょう。私は『烈風カリィン』。いざ尋常に勝負……グッツ？」

いきなり体が重くなり、膝を付きそうになる。

「これは??土の魔法?しかし、このような魔法など……」

「……土よ。万物を支える物よ。より強い力を与えよ。グラビティ」男が小声で詠唱する。

カリィンと男がいる周囲が高重力になり、動きがとれなくなった。

「まさか?精霊魔法?お前はいつたい……グッツ レビテーション」

必死の力で反重力を自らにかけける。平騎士レベルだとすぐに足を骨折して動けなくなる重力だが、

長年の戦闘経験によりレビテーションをかけることでなんとか避けられた。

しかし、歩くのがやっと。その隙に男が接近してくる。

「クツ エアカッター」右手でレビテーションをかけ続けながら、

必死に左手で風の魔法を放つ。

男は避ける事もしなかった。鎧にぶつかったカマイタチの刃は、表面に傷一つつけられなかった。

その様子に戦慄するカリン

「まさか、その鎧は魔法を通さないの・・・？」

近づいてくる男。カリンは数十年ぶりに恐怖を感じた。

必死に距離をとろうとするが、重力に取られてなかなか動けない。

男は何の影響もなく、すばやい動きでカリンの前に立った。

男は右手でカリンの首を掴み、持ち上げた。怒りが伝わってくる。

「この程度が貴族？ご領主様だと？無力な虫けらの分際で俺たちを踏みつけていたのか・・・」

首を絞められ、窒息する寸前のカリン

「やめなさい！！！！お母様をはなして」少女の声が響き渡った。

ピンク色の12歳ぐらいの少女が、恐怖に震えながら杖を突きつけている。

男は無視してカリンの首を絞める

「止めなさい。エアカッター」少女が杖をふる。

その瞬間、爆発がおこり、男は吹き飛ばされた。

泣きながらカリンのところに駆け寄る少女。

「ゴボツ ル・ルイズ。逃げなさい、この男は危険よ。」

「イヤです。私もお母様と一緒に戦います」

母をかばい、男に相対するルイズと呼ばれた少女。

男の纏っていた鎧は吹き飛び、黒髪黒目の平凡な顔があらわれた。

アルトは戦慄していた。

『まさか、魔法を通さないはずのこの鎧にダメージを与えるとは。』

しかも鎧の精霊力が散らされた。

至近距離にしたあの女には何の影響もないのに。なんの魔法だ』
警戒しながら近づいていくアルト。

「こないで」杖をふるルイズ。

一度目は食らったが、杖の振る方向から爆発を予測し、かわしていくアルト

「イヤーーーーー」

ルイズが恐怖で目をつぶる。後5歩で捕まえられるところまで来た時、杖を落とした。

ゆっくりと近づくアルト。その時、背中に激痛が走った。

「グッ なんだ!!!」

後ろを振り返ると、金髪の少女が震えながら立っていた。手にはナイフが。

「お・お嬢様に危害は加えさせません。わ・わたしが守ります」
それはアルトの求めていたもの。渴望していたもの。取り返そうと
していたもの。

何年も夢に見た。会いたいと願っていた。

その少女がアルトの血にまみれながら、必死にルイズを守ろうとしていた。

「フォシル???」

よろけながら近づくアルト

「こないで!!!」ナイフを振り回すフォシル

「・・・わからないか？僕だ・アルトだ。迎えに来たんだよ」

「何をいつているの!!!兄さんは金髪ですし、青い目だわ。何より、
こんな恐ろしい人じゃない」

明確に拒絶するフォシル。その言葉はアルトの心をえぐり、絶望に
向かわせる。

その場へあたり込むアルト。

『イカン!!』

インテリジェンスマイルのセケンは自分の意思でアルトに再装着し、
治癒を始める

『逃げるぞアルト』同時にフライの魔法を使って逃げる。

後には抱き合って泣き出す二人の少女と、放心したような女が残された。

明暗

ヴァリエール家

「よくあの男を止めてくれました。ルイズ共々貴方に救われましたね」

フオシルに礼を言うカリーヌ。

いつもはメイドとして給仕をしているが、今日は恩人として夕食に招かれていた。

「本当にありがとう。貴方は命の恩人よ」

隣に座ったルイズが言う

「そんな・ルイズお嬢様をお守りしたかっただけです。お礼なんでもつたいたないです」

フオシルが恐縮する。

「遠慮しないでいいのよ。貴方は母と妹を救ってくれたわ。ありがとう」

公爵家次女であるカトレアからも言われる。

「まったく。何か褒美をとらせよう。何でも言いなさい」

ヴァリエール公爵。いつもは厳格に接してくるが、今日は感謝の気持ちに溢れている。

「めっそもございませぬ。今までどおりお嬢様の近くでお仕えできれば」

「それでは我々の気持ちが済まん。そうだ、ルイズが嫁に行けばお前を奴隷から解放するつもりだったが、今日を持って解放しよう。

お前は自由だ」

「しかし、ここを追い出されても私には行く所がありません」

「別に追い出すつもりはない。今日から上級メイドとして改めて雇おう。給金は月30エキユー払おう」

「そんな大金をいただくわけには・・・」

「ヴァリエール家の上級メイドともなれば、ただの平民ではない。それなりの身なりと生活をしなければ、主人である我等が恥をかく。何十年も我が家に仕えてもらった使用人の中には、引退時にその労をねぎらい貴族籍が与えられる者もいるのだ。そのつもりで、今後も我等に忠誠をささげてほしい」

「そうよ。貴方はもうヴァリエールの一員なの。奴隷なんかじゃないのよ」

ルイズがはしゃぐ。

「皆様……ありがとうございます。一生お仕えさせていただきます。感極まって泣き出すフォシル。ルイズ達はその姿を暖かい目でみつめた。」

しかし、あの男何者だ。一人でわが魔法衛士隊を倒し、カリンまで追い詰めるとは」

ヴァリエール公爵。

「恐ろしい魔力をもち、土や風や炎を自在に使う。しかも、魔法の効かない鎧まで纏っていました。」

「危険だな……国に報告しておこう」

「ええ」

そんな会話を聞きながら、フォシルは物思いにふけていた。

「あの男……アルト兄さんを名乗っていた。兄さんの容姿とはかけ離れた男……しかし、声はそっくりだった。でも、あんな怖い男が兄さんであるはずがないわ」

今ではめつたに思い出さない兄。それぞれ複雑な思いを抱えて、夕食を終えた。

夜の森

アルトは一人で座り込んでいた。

「ふふ・まさか妹に刺されるなんてな。しかもこの容姿。兄とわからなくても無理ないか。俺は何のためにあの地獄を生き延びたんだ」

乾いた声で言う

「マスター。いずれわかってもらえるさ」セケンが慰める

「・・・いや。そうしたらフォシルに兄を刺したという重荷を背負わせる。そんな事はさせたくない」

「・・・そうか」

沈黙がおりる

「それで、これからどうする？」

「帰るか。インフェルノへ。妹が元気で生きていることがわかったんだ。それだけで充分だ」

自分にとって地獄だったあの場所。毎日自由になりたいと思っていた。

しかし、自由になったとたん、世界には自分の居場所がないということ进行し思いらされた。

そうしたら、仲間とすごしたインフェルノが懐かしく思えてきた。

「とりあえず、一度帰ろう。皮肉な事だけだな」

フライの魔法で飛んでいく。懐かしき故郷インフェルノへ。

その姿は黒い魔物のようだった。

インフェルノにて

暗い洞窟を降りていく。所々に灯がともっている

「あれ？どうしたんだ？帰って来たのか」テーブルに座って食事していたツネスが言う。

『帰って来たのか？』という一言に涙が浮かぶ。ツネスにすがりつき、泣きだす

「お、おい。どうしたんだよ。いきなり泣くなんて・・・」

その後、しばらく泣きつづけるアルトであった。

お茶を入れるツネス。オーク鬼の巨体で小さい湯飲みを使う姿は滑稽で、アルトは少し笑うことができた。
ヴァリエール家での出来事をはなす。

「そうか・辛かったな。そして、妹が無事でよかったな」
「ああ」

沈黙がおりる

「まあ、俺がここに残った理由もそれさ。これだけ容姿が変わっているというかオーク鬼だもんな。

故郷の村にまだ家族がいるはずだが、二度と会えないだろう」

「ツネス・」虚しく呼びかけるアルト

「今回出て行った子供たちだって、何人受け入れてもらえるか。容姿が変わった奴も多いし、変な魔法をつかえるようになっている。

いろいろな事情で親がいない奴、または親に売られた奴、居場所がないのはお前だけじゃない」

「そうか・・・」

「だから俺は残ったんだよ。ここに帰ってくる奴も多いだろう。その時迎えてやらないとな。まさかアルトが一番に帰ってくると思わなかったが」

明るく笑うツネス

「ありがとう。これからもよろしくな。兄さん」
「ああ、まかせておけ」

妹は光溢れる地上のヴァリエール家。兄は闇に満ちた地下のインフェルノ。それぞれの場所に居場所を見つけた。あった。

領主

ツネスの予想は当たった。

一度は自由を手に入れた奴隷達だったが、故郷に受け入れてもらうのは難しかった。

一週間ほど過ぎたが、既に40人ほどの者がインフェルノに帰って来た。

「両親が俺を見て、自分の子供じゃないって言うんだ。髪の色が変わっただけなのに・・・」

「私が故郷に帰ったら、家族は既にいなくなっていたわ。おじさんおばさんも冷たくて・・・」

「お前達なんかまだマシだよ。俺は両親に歓迎された。けど、一晩明けたら奴隷商人にまた売りとはされそうにな

って、あわてて逃げてきたんだぜ」

子供達は口々に愚痴を言い合う。

アルトは胸が締め付けられるような思いをした

（なんだか、良かれと思って自由にしたのに、余計に辛い思いをさせてしまったのでは？）

自分も辛い現実を経験してしまったので、申し訳ない気持ちでいっ

ばいになった。

(この子たちを守らないと)そう新たに思うのであった。

「アルト。助けて!!!!」

その時、スズミがあわてた様子で帰って来た。

「どうした？何かあったのか？」

「メシルが・・・領主に捕まったの!!!」

スズミが起こった事を説明する。

メシルとスズミは、トリステイン王国アモール男爵領の農村キヒス村出身だった。

キヒス村は貧しく、干ばつで不作だった年に、租税として子供達を献上させられた。

必死に頼む村人達から子供を連れて行き、奴隷商人に売ったのである。

「キヒス村に帰ったら、私の両親は生きていて受け入れてくれたんだけど、メシルの両親は既に死んでいたの」

途方にくれているところに、神官が来てメシルを連れて行ったらしい。

「しかし、メシルだってかなりの精霊魔法の使い手だぞ。自分を守

ることぐらいできるはずだけだな」

「それは・・・最初は魔法で神官を吹き飛ばしてやったの。だけど、私の両親を人質にとられてしまって。そうし

たら、私を見逃す代わりに、おとなしく奴隷に戻って・・・」泣き出すスズミ。

メシルとスズミは同じ村の同年齢の幼馴染で、インフェルノでもお互い励ましあって生きてきた。

泣き出すスズミに笑いかけて、メシルはつかまったのだという。

「そうか・・・わかった。メシルは俺の弟だ。必ず助ける」アルト。

「アルト兄ちゃん。俺たちもいくぜ！！！！」子供達もいう。

「お前達は危ないからここにいる。俺だけで充分だ」

子供達は首をたてにふらなかつた。

「俺たちだって魔法くらい使える。人質さえなかつたら戦えるさ」

「それに、メシルは俺たちの仲間だからな！！」

「わかったよ。ただ、全員で行くわけにはいかない。」

10人程の精鋭を選ぶ。

「よし。それじゃ俺たちの最初の戦いだ。スズミ、案内してくれ」

「うん!!」

フライの魔法でアモール男爵の館まで飛んでいった。

アモール男爵家

「ふふふ・・しかし珍しい奴隷だ。高く売れるだろう。よくつれてきたジョア神官」

檻の中にいれられているメシルを見て、男爵が笑う。

メシルは服従の首輪を付けられていた。殴られて所々に傷を負っている。

「平民の分際で杖も持たず魔法を使う珍しい奴隷です。まさに珍獣ですな」

太った神官が言う。

この神官はキヒス村に赴任して以来、領主の側に立ち、平民から搾取していた。

「しかし・・異端として問題にはならないか？」

「表に出さず、屋敷内で飼う分には問題にならないでしょう」

「それもそうか。いちいち平民など問題にするようなことはないか」

そういつてお互い笑いあう。

「しかし、こいつは一度奴隷として売り出したことがあってな。たしか、キヒス村の者だったな」

「あの村の者でもう一人魔法を使う逃亡奴隷を確認しております。あそこの者には何かあるのかもしれないね」

「いつそ、村人全員を奴隷として売り出すか。あそこの土地はやせていて、ギリギリまで絞っても大した収入にはならん。村の人口も50人を切っているしな。こいつからどうやって魔法を使えるようになったか聞きだして、それを村人全員に施し、奴隷として売りに出せば、かなり儲けられる。村の財産も没収して……くくく。」

「それはいい考えですな。さっそく聞き出しましょう」

神官が合図すると、屈強な男がメシルを檻からだす。

「くくく……子供が拷問で苦痛に泣き叫ぶのを見物するのはたまりませんな」

「ふふ……。それと、キヒス村に軍を派遣しろ。残された村人をすべて奴隷としてつれてこい!!!」

キヒス村に地獄が迫っていた。

侵入

トリステイン王国アモール男爵家

アルトたちはスズミの案内で上空を飛んでいた。

「あそこがアモール男爵の館よ」

「かなり大きいな・・・さて、どうするか。俺が正面から攻め込むから、お前達は裏から侵入しろ」

「わかったわ。」

スズミたちと別れて、正面の門に降り立つ。

「お前、何者だ!!!ここはアモール様の館だ。早々に立ち去れ」

「そうはいかない。弟がお前達にさらわれたんだ。返して貰うぞ。」

『ノームブレイド』

右腕の骨に埋め込まれたルーンが輝き、右腕が巨大な黒い刀になる。「な!!!」

自分の身長よりも長い刀で切りつける。門番達は真つ二つに切り裂かれた。

「侵入者だ。撃退しろ!!!敵は黒い鎧を着ている奴一人だ!!!」

アモール男爵家騎士団長が命じる

出動する騎士団。

「馬鹿なやつめ。一人で何ができる。全員、魔法詠唱」

全員で炎、風、土、水の攻撃魔法をぶつける。

ドドドーンという音が響き、侵入者の姿は土煙に隠れる。

「やったか??」

土煙が晴れると、そこには無傷で立つ侵入者の姿があった。

「な???」驚愕する騎士たち。

『バキユーム』

男が詠唱すると、急に息苦しくなる

「これは？」

「お前達の周りの空気をなくした。すぐに呼吸ができなくなる」
次々に倒れる騎士たち

「教える。キヒス村から連れて行った子供はどこだ」

一番身なりのいい騎士を尋問するアルト

「なんの ことだ キヒユ ヒユ いき が・・・」

必死に呼吸しようとするが、息がつかまってしゃべれなくなる。

「ならば、領主はどこだ」

「に 二階だ・・・」

「そうか。お前等はしばらくおとなしくしている。『マリオネット』」
脳に電気を流し、動けなくする

『スケルトン』 スズミが唱えると、背骨のルーンが光り、子供達の姿が消えた。

自分の体に魔法をかけ、光を通過させて透明にする精霊魔法。

「みんな。静かにね。手分けしてメシルを探して」

スズミの指揮により、屋敷中に散らばる子供達。

地下では、メシルが拷問にあっていた

「おい、どうやってお前達は魔法が使えるようになったんだ。吐け
！！」

複数の獄吏に鞭で打たれるメシル

「セメント」メシルは小声で唱える。鎖骨に刻まれたルーンが輝く。
自分の体の表面に硬化の精霊魔法を唱え、鞭から身を守っていた。

「ケツ 強情な奴だ。おい、火責めだ」

火をつけた松明を押し付ける。

しかし、メシルが纏った硬化の膜が身を守った。

「くそ！！！！なんなんだこいつは」

「何をしても傷つけられないとは・・・」

「何をしているんです。こいつは異端者だ。もっと激しい拷問をしない」

思うように拷問シーンを堪能できなくて不満に思うジオア神官。

「し・・・しかし、こいつは化け物ですぜ。何をしても効きません」

「もういいです！！！神の祝福を得た私が直接鉄槌を下します。どきなさい！！！」

獄吏たちをどかせ、縛り上げられているメシルに近づくジオア。

『アイスジャベリン』複数の氷の槍がメシルに突き刺さる。

「はは・異端者などこんなものです」うなだれたメシルの髪を掴み、顔を上げる。

メシルと目があった。

「ふふ。馬鹿め。『セメント』」ルーンが光る。

「ば・・・馬鹿な、これはなんだ！！」

両手両足が固まり、ジオアは動けなくなった。

「動くな。鞭を捨てる。少しでも動くと、こいつを殺す！！」

服従の首輪に命令して首を絞めようとする獄吏を制する。

獄吏たちは鞭を床に放り出した。

「いい子だ。『ストーンスピア』」ルーンが光る。獄吏たちの足裏から金属の棘が飛び出す。

「グアアアア」獄吏たちは足をズタズタにされ、床に転がった。

獄吏たちを見て、ジオアは恐怖で失神した。

「ふん。この程度で気絶かよ。俺たちはもっと恐ろしかったんだぞ！！！」

幼い顔をゆがめて笑うメシル

「メシル！！大丈夫だった？」拷問室を見つけて駆け込むスズミ

「ああ、大丈夫だよ。こんな奴等に負けるもんか」にっこり笑うメシル

スズミはメシルに抱きついて喜んだ。

「おいおい、いちゃつくのは後にしろよ」「他の子供達がからかう
「うるさいな。でも、助けに来てくれてありがとうな」
「どういたしまして。これからどうする?」
「あのクソ領主にお返しするさ」
メシルたちは二階に移動した。

領主の部屋の前でアルトと合流する。

「メシル。無事でよかった。心配したんだぞ」

「アルト兄さん。助けに来てくれてありがとう」

「ああ。男爵はこの部屋にいるみたいだけど、どうする?」

「もちろん。奴隷にしてくれたお礼をキッチリさせてもらおう」

「お前に任せるよ。他の者はこの家の財貨を全部つばってしまえ」
歓声を上げて子供達が屋敷内に散る

「スズミはいかないのか?」

「私も男爵様にお仕置きさせてもらおう」

黒い笑いをうかべるスズミだった。

壊滅

アモール男爵家 二階

「いくぞ」アルトがドアを蹴破ると、アモール男爵とその家族が震えながら抱き合っていた。

「お前等、何者だ。貴族である我等に逆らうなど」
精一杯虚勢を張る太った男。

「悪いが、貴族も神官も平民もない。俺の弟に手を出す奴は皆殺しにする」

殺気を込めて言い放つアルト

「俺を二回も奴隷扱いするようなやつは、なぶり殺しにされても文句言つ資格はないわな」

メシルが睨みつけながら言う

「はは、何その太った醜い体。貴族と威張って私達を踏みつけにして……。あんたらに贅沢させるために私達が生きているわけじゃないのよ!!!」

スズミが血を吐くような思いをたたきつける。

アモール男爵は恐怖に震え上がった。

「ま、まで。今頃お前達の村の人間は、わが軍によってつかまつているぞ。もし私達に少しでも傷をつけると、どうなっても知らんぞ」
脅しにかかる。

「キヒス村の皆まで。これはもう殺すしかないわね」

「本当に、何処まで卑怯なんだか」

「これ以上お前等を見ているのは耐えられないな。『マリオネット』」

アルトが支配の魔法を使う。動けなくなる男爵とその家族。

「こいつらを家の前で磔にして、見せしめにしよう。館は燃やし尽

くせ」

アルトの命令で、豪華な館に火を放たれた。

アモール男爵家の軍は、キヒス村を急襲し、村人の殆どを縛り上げて馬車にのせた。

村の家に火を放ち、燃やし尽くす。

それを見て絶望する村人たち。

「なぜこのようなことを・・・私達が何をしたというのですか!!」
スズミの母が涙ながらに訴え出る。

「ははは、役に立たたん平民など必要ない。どうせお前等なんぞ大した税を収めることもできない役立たず。奴隷として売った方がましだ」

軍の隊長が哄笑する。破壊と略奪の快感に酔っていた。

意気揚々として放火していたところに急報が入る。

「申しあげます。館に何者かが攻めてまいりました。至急おもどりください」

必死になって脱出してきた兵が言う。

「なに? どういうことだ」

「わかりません。瞬間間に館の兵は打ち倒され、男爵も・・・」

「ええい!! わかった。全軍急いで館にもどるぞ!!」

「この者たちはいかがいたしましたしょう?」

「縛り上げて放置しておけ!! 後で連れていけばよい」

村人を焼け残った家に押し込め、急いで全軍は館にもどった。

急いで戻ろうとしていたアモール軍が見たものは、炎上する館の前で、礫になっっている男爵とその家族だった。

ジョア神官や他の使用人も礫にされている。

皆、息も絶え絶えである。その周りに黒い鎧を纏った男と、子供達
がいた。

「貴様等・・・何をしておる。男爵様を放せ！！」

隊長が高圧的に命令するも、子供達から冷笑を浴びせられた。

「お前達が捕らえに向かったキヒス村の人達はどうした？」黒い男から問われる

「あんな者たちなどどうでもいい。縛り上げて村においてきたわ！！」

その言葉を聞いて黒い男と子供達が笑う

「よかった・・・人質にされてたら困ってたわね」

「これで心置きなく殺せるよ。えい！！ストーンスピア」

男の子が手を振ると、石の槍が地面からでて、アモール男爵を串刺しにした

「じゃ私は他の人を。シャインレーザー」

女の子が手を振ると、光の槍が空中から出て、残りの家族を串刺しにした。

「なに・・・？」隊長は目の前の光景が信じられなかった。

杖も持たない平民の子供が、見たこともない魔法を使って貴族を殺した。

「き・・・貴様ら・・・」怒りのあまり、声も出ない。

「じゃ、さつさと片付けて帰るぞ。皆、一斉射撃」

黒い鎧の男の号令で、一斉に手を振る子供達。

光・闇・水・火・土・風・雷・氷・ごちゃ混ぜに魔法が暴威を振るう。

メイジで構成された30人のアモール軍は、一瞬で壊滅した。

「ぱ・・・ばかな、ばかな、こんなことが・・・」

両足に氷の槍を受け、必死に逃げようともがく隊長。その体が突然重くなり、全身の骨が砕ける。

「グラビィテイ」その呪文が最後に聞いた言葉になった。

復興（前書き）

更新がおくれましたた・・すいません

復興

アモール軍を壊滅させたアルトと子供達

「なあ、これからどうする？」メシル

「とりあえず、キヒス村の皆を助けましょう」スズミ

一同はキヒス村に飛んだ。

改めてキヒス村を見ると、ひどい被害をこうむっていた。

村人達は傷つき、家は理不尽に焼かれている。

それでも、生き残った村人はお互いの無事を喜びあった。

「アルト様、おかげで皆助かりました。そして、スズミやメシルを助けてくださって、お礼の言葉もありません」村長であるスズミの父親が言う

「気にしないでください。スズミもメシルも俺の兄弟同然です。しかし、貴方はなぜ自分の子供を奴隷などに・・・」
その点だけがアルトにとって不愉快だった。

「言い訳をするつもりはありませんが、村民全員が奴隷として強制的に連れて行かれるか、子供を自発的に差し出して一部の被害に留めるかを領主に強いられました。スズミは私達夫婦の宝でしたが、泣く泣く手放したのです。村長として、自分の娘を最初に差し出さねばなりませんでした・・・」

スズミの母親がすすり泣く。

「スズミの親を名乗る資格は私達にもはやないのに・・・帰ってきたスズミは何の恨み言も言わず・・・」

沈黙がおりる。

「子供を奴隷に取られた村人の中には、心労のあまり病気になるって死んだ者もいます。メシルの両親のように」

「私達平民は奴隷と紙一重。領主が非道だと、いつでも理不尽に奴隷にされてしまうのです・・・」

「我慢が出来なくなった平民は良き領主のもとに逃げます。しかし、最近では、どこの領主も重税を課すようになり、餓死する平民も大量にいます」

村人たちが言う。

スズミの父親が意を決したように言う。

「アルト様。助けていただいた貴方様にすがりたいと思います。我々を導いていただけませんかでしょうか。我々は力なき平民。力ある者の庇護が無ければ、死ぬだけなのです。アモール男爵が死のうとも、

次にくる領主や代官がまた同じことを繰り返します」

「お願いします」「お願いします」

村民全員が土下座をしてアルトを拜む。

「・・・私にとってはスズミもメシルも兄弟同然。その身内である貴方方をほうっておけない。私でよければ力になりますよ」
村民や子供達から歓声があがる

「すごいや。アルト兄ちゃん。ご領主様だ」メシル

「私もお父さん達をまもるからね！！」スズミ

他の子供たちも同意した。

数日間村に滞在して復興に力を注いだ。
アルトと子供達は精霊魔法を駆使して、村を再建させていった。
エアカッターで木を切り、レビテーションで運搬し、錬金で加工し、
セメントで固定化する。
瞬く間に出来上がる家。

怪我をした村人をヒールで癒す。水の精霊魔法は強力で、失われた
手足すら再生できた。

ライトニングで雷を起こし、窒素化合物肥料をつくり、荒れた畑にま
く。
サーチの魔法で山の獲物を探して狩りをする。
セパレーションの魔法で鉱物の分離精製をしているいろいろな鉱物をと
りだしたり、海水から塩を作る。

またたくまにキヒス村は復興していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2902v/>

マイナスの使い魔

2011年9月29日22時56分発行